

|||||
 卷 頭 言
 |||||

「ルビコン川を渡るか」——会長からのメッセージ



杉 田 利 男

私は、本年6月1日から、第11期の本学会会長に選出されました。学会の発展に努力する所存でありますので、ご支援、ご鞭撻の程をお願い申し上げます。

巻頭言の執筆を求められましたので、会員の皆様へのご挨拶と共に現在の理事会が当面している問題について記させていただきます。

これ迄、理事会は、歴代の会長方の主導の許に「入りを計って、出ざるを制す」の方針で、大変な努力にて、“積み金”をされてこられました。その目的は2つであったと思います。1つは、本学会の顔である「表面科学」のマンスリー化でした。これは、年4冊から、86年に6冊、88年に9冊、90年に10冊と、順次レベルを上げ、ついに95年に12冊発行が達成されたのであります。この間の関係者の皆様のご努力に深く感謝致します。

第2の目標は「学会の法人化」であります。このための資金準備も長期にわたる大努力により、「法人化を射程内に捉える」レベルに達しつつあります。そして、具体化すべきかどうかの検討を、常設の財務委員会に加えて、96年度、97年度の2回、拡大常務理事会を開いて、集中的に行いました。毎回、15人位の理事、評議員の有志が参集し、「本学会の法人化におけるメリットとデメリット」について、寝食をともにして議論を致しました。

予想されるメリットとして、

- (1) 表面科学の分野で、公に認知された学術団体となれる。
- (2) 出版、国際会議などで、国庫補助ないし税制上の優遇がえられる。
- (3) 発表する研究・論文の公的価値が高まる。

また、デメリットとして、

- (1) 事務局長の新設を含む、事務体制の整備
- (2) 法人体制に合致させるための理事定数の削減
- (3) 総会出席会員数の増員

等、であります。

本年度は、来る8月中旬に第3回の拡大常務理事会を開き、さらに議論を深め、「法人化すべし」の結論が真に得られるか否かによりまして、“ルビコン川”を渡るか否かが決まらましよう。

この問題について、会員の皆様からのご意見もお待ちしております。

(本会会長、東京理科大学工学部・近代科学資料館)